「2018 年度春学期授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長　**大西秀之**

はじめに

2017 年度に改定が行われた「授業に関するアンケート」も今回で 2 年目となり、現在の形式と内容によるアンケートが一巡したことになります。このため、現在の形式のアンケート結果が、累積的にフォローできることとなり、経年的な変化などの検討も今後行うことが可能となりました。このような蓄積は、教育の内部質保証をはじめとする大学における PDCA サイクルの実践に貢献することが期待できます。

しかしながら、授業に関するアンケートの目的は、教員が授業改善を行うことを第一義とするものです。このような目的の下、本総評では、個々の教員が自らの授業を学科や大学全体の教育のなかでの位置づけを意識しながら、改善に向けた取り組みを行うための参考に少しでもしていただくことを意図しました。

以上のような目的の下、今回の総評は、昨年度に引き続き学科・科目区分単位で行っていただいた分析を基に、特に到達目標の達成度に注目して学科間で比較を行いました。またこれも前回と同じく、各学科・各科目区分から御提出いただいた報告に対するコメントを付記いたしました。この目的は、各学科・各科目区分が個々の授業に対する評価のなにを重視しどう評価を下しているか確認するとともに、それらの異同を明らかにすることより、アンケートの結果や評価が個々の授業改善への貢献はいうまでもなく、各学科・各科目区分にとっても自己点検の一材料にしていただくことも射程に入れています。

授業に関するアンケートは、各授業を担当されている個々の教員をはじめ、関係各所の多大な負担と努力によって実施されています。そうした負担と努力は、ひとえに時代の要請に応じつつ、より良い授業を目指し改善にほかなりません。その意味でも、本総評は、一人ひとりの教員あるいは各学科・各科目区分がより良い授業を追究し、ひいては本学の総合的な教育力を高めるための一助となることを期待いたします。

質問項目ごとの分析評価について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iii のステップを踏まえて作成しています。

i．　授業に関するアンケートの集計は別冊「2018 年度春学期 授業に関するアンケート実施結果報告書」にまとめられています。その他、個々の科目（クラス）の集計は、当該授業担当者に配布されています。

ii．　教員コメントを専任教員に限って全員に記載していただきました。教員コメントは、アンケートの質問項目ごとにコメントを書いていただく形式のものですが、個々の科目ごとではなく、教員 1 名につき 1 枚にまとめて記入していただいています。

iii．　学科等の授業評価報告を各学科・科目区分の責任者の方に記入していただきました。各責任者は、当該学科等の個々の専任教員からのコメントや集計結果を基にして、学科等全

体としての授業改善、学生の学修行動の把握、学科等としての到達目標の把握に努めていただきました。

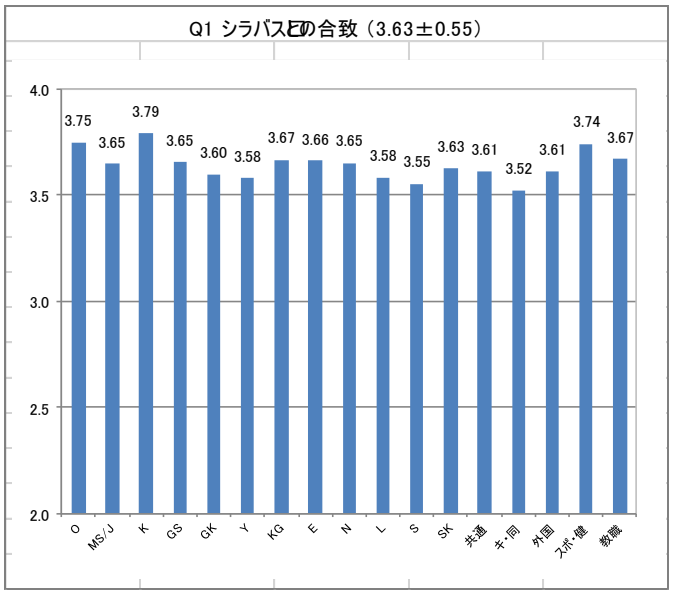
（1）「授業実施に関する質問」の結果について

1．授業内容はシラバスに合っていましたか

全体結果

「Q１シラバスとの合致」は、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 90%を前後となっていました。この結果から、前回 2017 年度の春学期・秋学期に引き続き、全体的な傾向としてほとんどの授業でシラバスに沿った内容が提供されていたと評価できます。加えて、各学科・科目区分からは、前回までとの比較に基づき改善されていたことが報告されていました。むろん、今回も個別授業のなかに低い評価となった授業があったことが指摘されていましたが、その理由が的確に分析されているとともに改善策が提示されていました。前回も指摘しましたが、シラバス通りに授業が提供されていることは、学生にとっても教員にとっても「当たり前」と受け止められている傾向が進んでいるため、シラバスの変更が行われる場合は、当該授業の受講生に対し変更の理由を説明することが、「当然の義務」と認識すべき状況になっていると思われます。

学科・科目区分コメント



各学科・科目区分からの報告では、全体的な数値結果か、他学科などとの平均の比較で評価しているものがほとんどでした。そのようななか、音楽学科、社会システム学科、キリスト・教同志社関係科目では特定の科目に注目し改善の必要性などを、また社会システム学科と音楽学科では今回得られた結果に対する分析や全体的な改善の取り組みを、それぞれ記載報告されていました。こうした評価は、今回のデータに対する是非を超え、授業に関するアンケートの有効な分析・活用として、他の学科・科目区分にも参照できる事例になるかと思います。

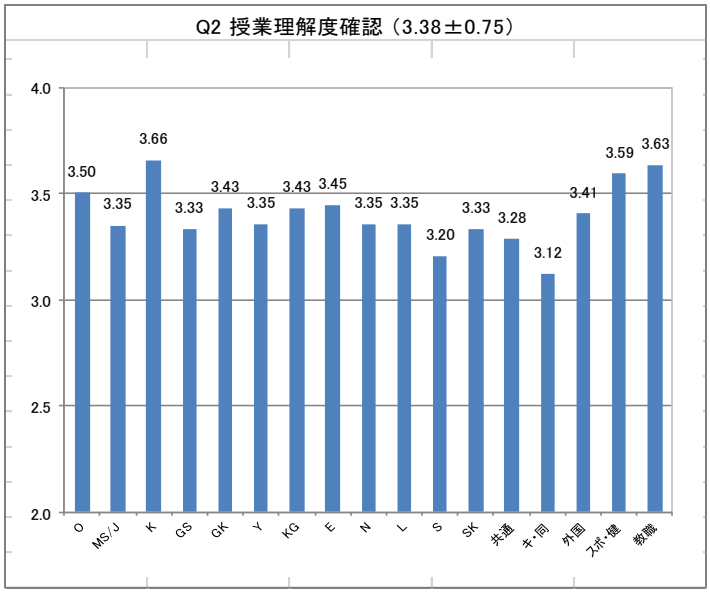
2．受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか

全体結果

「Q２授業理解度確認」は、ほとんどの学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が、前回 2017 年度秋学期に引き続き全体で 80～90%以上となっていました。また 80%をやや下回ったキリスト教・同志社科目も 78.5%であり、それほど大きな格差ではないと評価できます。こうした集計結果から、前回以上に受講者数や講義形式にかかわら

ず、受講生の評価が改善している傾向が指摘できます。こうした結果は、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科・各科目区分が取り組まれた授業改善の賜物にほかならないと評価できます。なお学科・科目区分からの報告では、全体的な傾向に問題がないことを評価しつつ、一部科目に評価の低いものや格差の大きなものが含まれていることが指摘されていました。個別科目まで注目して評価ができていることは、授業改善にとって非常に好ましい傾向にほかなりません。昨年度も指摘しましたが、理解度を確認しながら授業を行うことは、授業形態・受講者数・学生の資質などにより異なることが予想されますが、より良い授業を目指し今後とも試行錯誤して行くことが不可欠になると思われます。

学科・科目区分コメント



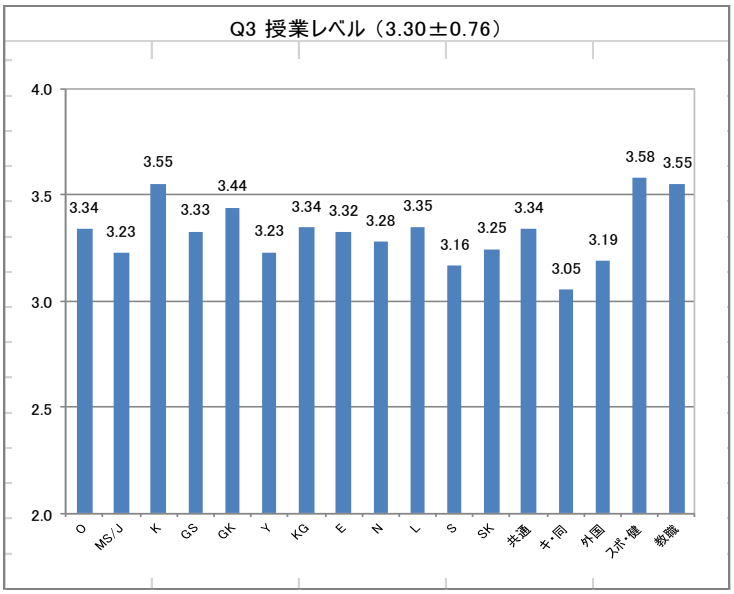
各学科・科目区分からの報告では、音楽学科で改善すべき具体的な科目が、看護学科・食物栄養科学科・人間科学科で具体的な改善方法が、社会システム学科と日本語日本文学科で講義形式による評価の違いが、それぞれ指摘されていました。こうした報告記載から、昨年度以上に各学科・各科目区分において受講生の理解度を確認した授業運営・進行の必要性が意識されていることが窺われました。

３．授業レベルは自分に合っていましたか

全体結果

「Ｑ３授業レベル」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が、昨年度から一層改善し、ほとんどの科目区分で 80～90%以上となっており、またその他の科目も 70%を超えていました。なお国家試験対策など一定水準の知識の習得が求められる一部の学科では、昨年度と同様に「４そう思う」の評価が下がる傾向が少し認められますが、これは授業の目的が反映している結果かと推察されます。またそうした傾向は、学科・科目区分の報告でも、受講学生の学力レベルに起因する問題であることなどが指摘されていました。これも昨年度の報告同様に、授業の目的から、レベルの調整が難しいケースに関しては、カリキュラム全体や授業外でのフォローなどの取り組みも必要になるかと思われますが、いくつかの学科ではそうした対策の取り組みが報告されていました。

学科・科目区分コメント

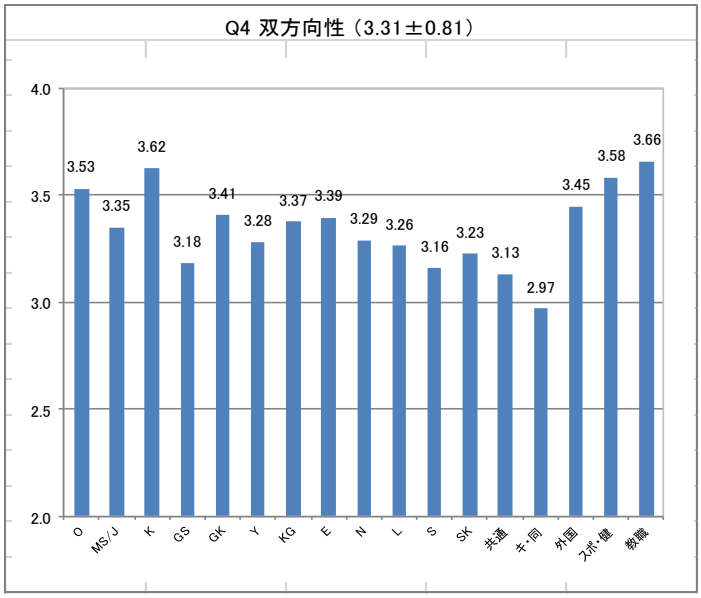


各学科・科目区分からの報告では、キリスト教・同志社科目、医療薬学科、音楽学科で個別科目に対する評価・分析が、メディア創造学科や看護学科などで具体的な改善方法が、それぞれ指摘されていました。言うまでもなく、授業に関するアンケートは、決して高評価を得ることそのものではなく、時代の要請に対応しより良い授業を実現するための参考資料していただくこが主目的です。したがって、授業アンケートの質問内容や結果を、各学科・科目区分でどのように活用するか積極的に検討していただければ幸いです。

４．教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか

全体結果

「Ｑ４双方向性」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が、90%を上回った国際教養学科、教職に関する科目、スポーツ・健康科目をはじめ、その他の学科・科目区分でも 70～80%以上となっていました。集計結果から、昨年と同様に受講者数の多い講義形式が多い学科・科目区分では、「４そう思う」の評価が下がる傾向が認められましたが、全体的な傾向として改善が進んでいること評価できます。また今回の報告でも、各学科・科目区分において積極的に双方向性を意識した様々な授業実践が試みられていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。このため、双方向的な授業は、もはや学生にとって特別なものではなくなってく、どのような授業形態であれ盛り込むことが、今後ますます必須になってくると思われます。



学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、メディア創造学科、医療薬学科、教職課程センターで具体的な改善方法が、また音楽学科、看護学科、食物栄養科学科では特定科目を念頭に置いた対策が、

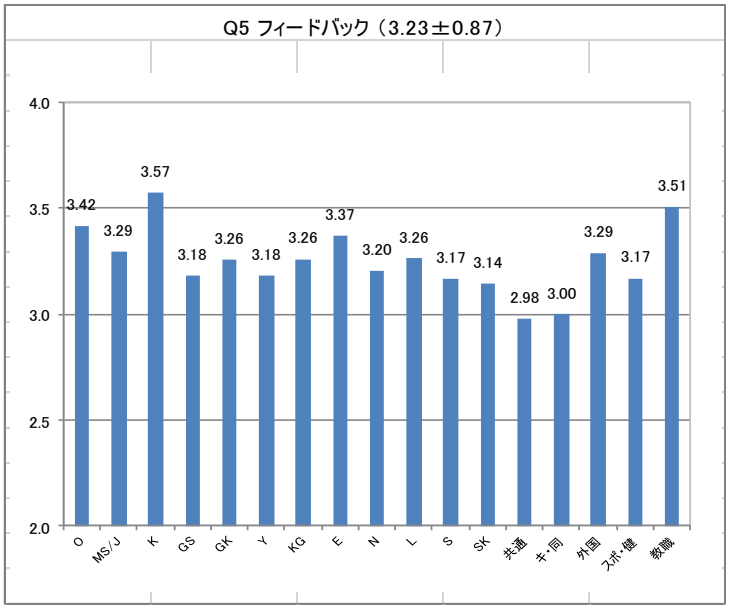
それぞれ指摘されていました。なお本年度も、一部の学科・科目区分では、授業の形態や目的によっては、双方性が取り辛い科目があることを指摘されていました。
むろん、双方性の確保は、決して必須の方向性ではありませんが、授業の形態や目的ごとに適合性の是非を検討することは、全体の改善に寄与する有益な視点をもたらす可能性を孕んでいると期待しています。

５．　提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか

全体結果

「Ｑ５フィードバック」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が、スポーツ・経験科目で 50%台、音楽学科、共通学芸科目、キリスト教・同志社科目で 60%台、その他の学科・科目区分で 70%前後～80%となっていました。この結果は、前回と比較すると、やや低下傾向が窺われました。受講者数や授業形態によっては、取り組みに様々な制約があると思われますが、受講生に対するフィードバックの推進は避けられない方向性と認識されています。とはいえ、この方向性は、教員の負担を増加させるため、大学全体としてサポート体制を充実させて行くことが不可欠であると考えています。

学科・科目区分コメント



学科・科目区分からの報告では、看護学科で具体的な改善策が、社会システム学科でクラスごとの傾向が記載されていました。また複数の学科で、教員数や受講生数の多寡により、フィードバックの実施に対して難易度に違いがあることが指摘されていました。ただ昨年に比べると、フィードバックの具体的な対策や工夫に関する言及が少なくなっていました。教員に対する負担となる課題ではありますが、授業改善にとって今後必須となる課題であるため、各学科・科目区分においても実施に向けた意識を高めていただければと考えています。

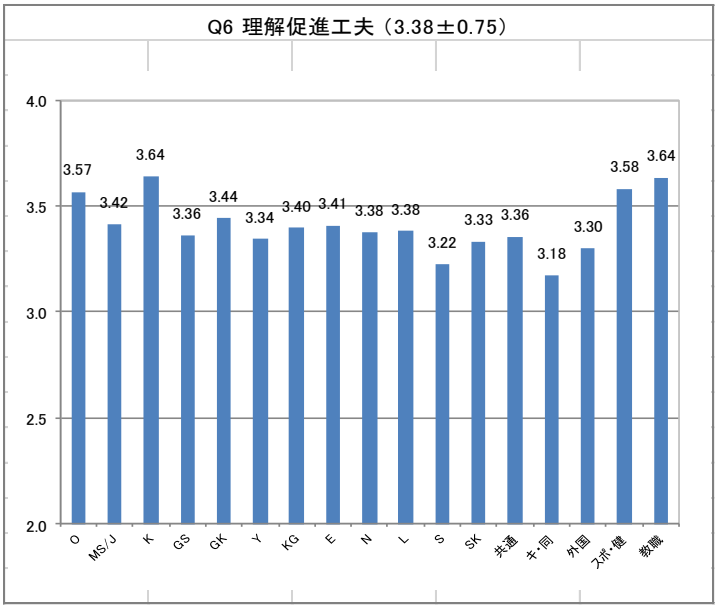
６．言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか

全体結果

「Ｑ６理解促進工夫」は、前回に引き続き、ほとんどの学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 80～90%以上となっていました。唯一 80%を下回ったキリスト教・同志社科目も、79.7%であったため、それほど問題となる格差ではない、と評価で

きます。こうした結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で言葉以外によって理解を促す工夫が行われていたと評価できます。昨年度の総評でも繰り返し言及させていただきましたが、マルチメディア機器をはじめとする授業補助機材の活用などが、受講生にも担当教員にも一般化したことの結果であると推察されます。

学科・科目区分コメント



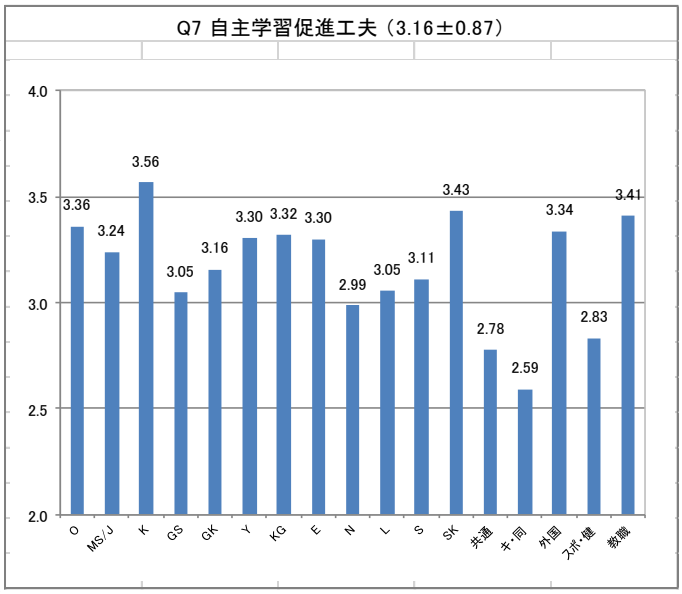
各学科・科目区分からの報告では、音楽学科から特定科目の改善が、看護学科と教職課程センターから具体的な実践事例が、食物栄養科学科や人間生活学科から全体の評価が、それぞれ記載されていました。ただし、こうした工夫が一般化・通常化したためか、昨年度まではほとんどの学科・科目区分で言及されていた、具体的な事例などの記載が今回は相対的に少なくなっていました。もっとも、この傾向は、必ずしも憂慮すべきことではなく、マルチメディア機器などの補助機材の活用が当たり前となった現状を反映している可能性もあり、設問そのものの意義を含め検討して行く必要があると考えています。

７．自主学習を促す工夫がなされていましたか

全体結果

「Ｑ７自主学習促進工夫」は、前回と同様に「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 50%前後～90%以上とバラつきが認められました。この内、すべての学科と外国語科目、教職に関する科目で 70%以上の結果となっていました。この結果から、受講者数や授業形態によって取り組みや工夫が異なることが推測されるものの、昨年度に引き続き全体的な傾向として多くの授業で自主学習を促す努力がなされていたと評価できます。これまでの総評でも指摘しましたが、この質問項目はＱ４・Ｑ５・Ｑ６とも関連するものであり、各担当教員の様々な工夫や試みによって学生に自ら考える機会が提供されていることの反映と推察されます。前回から述べていることですが、昨今の入試改革によって、初等教育から高等教育までの学校現場で、自ら思考する力を養うためのアクティブ・ラーニングの必要性が急速に高まっているなか、大学全体として一層の取り組みが求められる課題になると思われます。

学科・科目区分コメント



各学科・科目区分からの報告では、他学科との平均の比較など全体的な数値結果を評価しているものがほとんどでした。

ただ看護学科、食物栄養学科、日本語日本文学科などでは、具体的な取り組み事例を上げたり、自主学習に対する批判的視点を交えそのあり方の意義を問い掛けている指摘などもありました。言うまでもなく、自主学習は、時間の長短を目的とするのではなく、なんのために受講生に課し、それがどのような学びの意味があるのか、常に問い掛けることこそが重要であると考えるべきでしょう。

８．工夫してほしいと思ったことを選んでください（複数選択可、なしも可）

全体結果

「Ｑ８工夫してほしい項目」は、前々回前回 2017 年度春学期・秋学期と同じく、パワーポイント・話し方・配布資料などで要望が高く、ほとんどの学科・科目区分で類似した結果となっていました。これらの項目は、本学の受講生にとって学科・科目区分更には授業形態の違いを超えた、改善要求の対象として要望されていることが確認できました。他方、マナビーや教科書は、学科・科目区分で比較的数値に差異があり、それぞれの授業の形態・実践・目的などを反映している、とこれも前回までの傾向と同じく推察されます。実際、学科・科目区分からの報告では、同じような数値でも、それぞれ受講生からの要望に違いがあることが読み取れます。なお残りの項目では、私語対応よりも公平性に対する数値に違いが認められました。また公平性に対する要望は、比較的少人数授業が多いと予想される学科・科目区分で前回と同様に高くなる傾向が認められました。これも先の総評でしてきたように、むしろ大人数による講義形式よりも少人数で行う演習形式の方が、教員や受講生同士の関係性が密になることが反映している可能性が追認されました。以上から、Ｑ８の各項目の結果は、授業形態ごとの運営の参考にもして行くことができると思われます。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、昨年度までと同様に比較的多くの学科・科目区分で受講生から寄せられた要望に対して、それぞれ分析や批判的検討を加えられていました。こうした分析や検討は、単なる受講の要望の追認に陥らず、授業改善ひいては大学が担うべき教育のあり方を考える上で重要になると思われます。

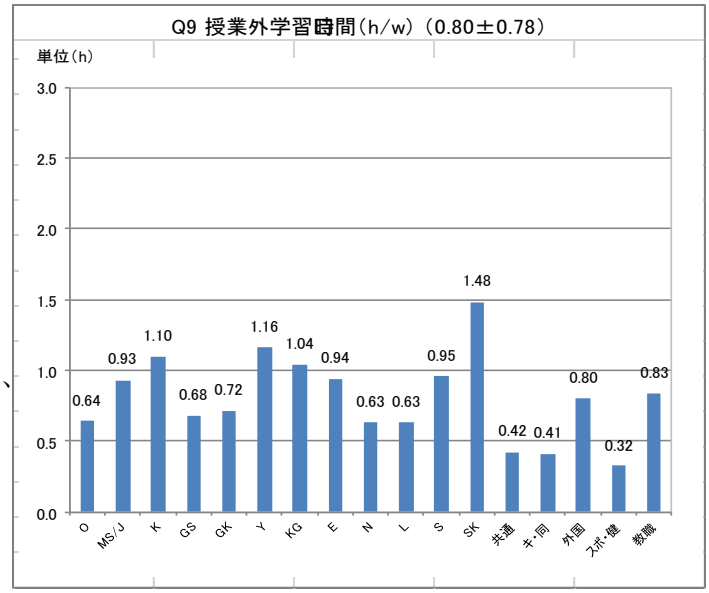
９．この授業の予習、復習、自主学習に１週当たり平均どれくらいの時間をかけましたか

全体結果

「Ｑ９授業外学習時間」は、まず国際教養学科、医療薬学科、看護学科、英語英文学科、食物栄養科学科管理栄養士専攻を除く学科で、30 分未満が 50%前後～60%台となっていました。また外国語科目と教職に関する科目を除く科目区分では、30 分未満が 80%前後～90%となっていました。まずこの結果は、学習時間が短い学科等では講義形式の授業が多いこと、また相対的に学習時間が長くなっている学科等には演習形式などの授業が多いことが反映している、と昨年度までの傾向からも推察されます。一方、学習時間が長い 4 学科 2 科目区分は、到達レベルが明確にスコアー化されている国家資格試験や語学検定試験などを、前提や目的とした授業が多いと思われます。授業外学習の必要性に関しては、従来から大学教育に対して指摘されている課題でありますが、昨年度 2 回の総評でも指摘しましたが、ただ闇雲にテストの機会や課題を数多く出すことで改善すべき問題ではなく、どのような目的でどんな学習を受講生に取り組んでもらいたいのか、当然授業ごとに異なることと思われます。いずれにせよ、今後とも学科・科目区分の枠組みを超え大学全体で議論して行くべき重要課題であると考えています。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、今回も数値結果ではなく、具体的な課外の学習時間に関する多様な意見が記載されていました。自主学習でも指摘したように、学習時間の確保を目的とするのではなく、なんのために受講生に課し、それがどのような学びの意味があるのか、常に問い掛けることこそが、授業改善ひいては大学が担うべき教育のあり方を考える上で重要になると思われます。

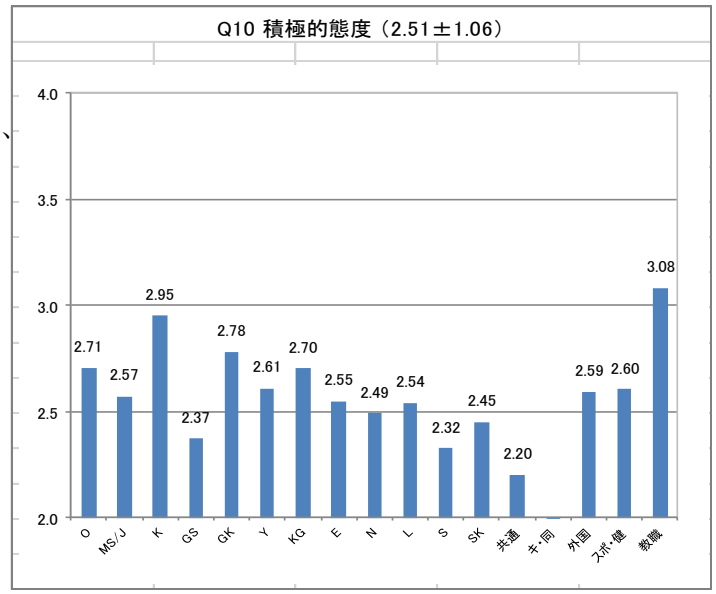


10．あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか

全体結果

「Ｑ10 積極的態度」は、「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が、前回 2017 年度秋学期と比して、全体的な傾向として必ずしも大幅な改善は認められませんでした。この結果は、改善可能な授業形態や受講生数のもので進んだため、頭打ちになったことが理由と推察されます。なお昨年度の総評でも指摘しましたが、この項目は、Ｑ４双方向性の工夫などとも深く関係すると推測されることから、異なる質問項目をクロスチェックすることで、授業改善の方向性を今後とも探って行く必要があると考えています。

学科・科目区分コメント



なお各学科・科目区分からの報告では、全体的な数値結果よりも、具体的な取り組みの事例や授業形態ごとの是非などが記載されていました。このような傾向から、数多くの学科・科目区分で学生が積極的な意見を述べることを必要な授業実践と認識されている、ということが窺われました。ただし、医療薬学科や英語英文学科などからは、そもそもすべてに授業に必要なものであるか、という批判的な意見がありました。とはいえ、今後ともアクティブ・ラーニングの必要性が高まってくることが予想されることから、授業の目的や形態によって異なってくるため、各学科・各科目区分に応じた取り組みを志向していく必要があると考えています。

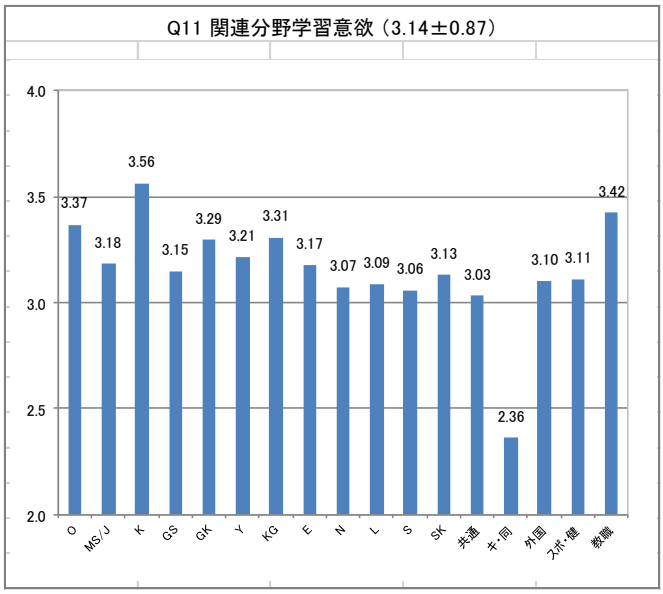
11. あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習を更に深めたいですか

全体結果

「Q11 関連分野学習意欲」は、前年度 2017 年度春学期・秋学期と同じく、キリスト教・同志社関係科目を除く学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 70%～90%となっていました。この結果から、引き続き全体的な傾向として、ほとんどの授業で本学学生の学習意欲を高める内容が提供されていたと評価できます。なおこれも前年度に指摘したことですが、キリスト教・同志社関係科目に関しては、学科を越え全学共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。ただそれでも、前回と同様に 40%を超える結果であったことは、受講生に本学の理念が伝わっている反映であると思われます。むしろ、このキリスト教・同志社関係科目での学びを、各学科・科目区分で如何に継承して行くかは、本学全体のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題であると認識しています。

学科・科目区分コメント

なお各学科・科目区分からの報告では、全体的な数値結果を分析されている報告、個別具体的な事例の分析、この項目に対する是非の検討、などが記載されていました。前回も指摘したことではありますが、カリキュラムに必修の割合が高い学科・科目区分と、自主的な選択の比率が高い学科・科目区分では、受講生の履修の動機に大きな違いがあると推測されます。こうした条件の違いを考慮し、受講生に対して学習への動機づけをどのように行うか模索することが求められると思われます。



12. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか（複数選択可）

全体結果

「Q12 履修理由」は、前回と同じく６学科・科目区分で「授業内容」の選択率がトップで 50%を超えていました。これに対して、これ以外の 11 学科・科目区分の「授業内容」の選択率は 10～30%で、また「授業内容」の採択率がトップでなかった７学科・科目区分の選択率のトップは「必修」と「資格」でした。こうした結果は、2017 年度春学期・秋学期と基本的に大きく変わっていませんでした。なおシラバスで「授業内容」をしっかりと説明することは、「必修」が少ない学科・科目区分は言うまでもなく、「必修」が多く「資格」取得を目指す学科・科目区分においても、その内容を受講生に明示することによって積極的かつ能動的な授業の履修を促すためにも重要との認識が求められます。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、昨年度までと同じく、科目区分では数値結果の分析に基づく評価が多かったのに対して、各学科ではそれぞれのカリキュラムに基づく評価が相対的に多く提示されていました。この結果は、Ｑ１１と同様に必修の比率あるいは自主的な選択の比率の多寡が多分に影響していると推察されます。こうした背景を考慮に入れ、各学科が評価されていることが窺われました。

13. 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか

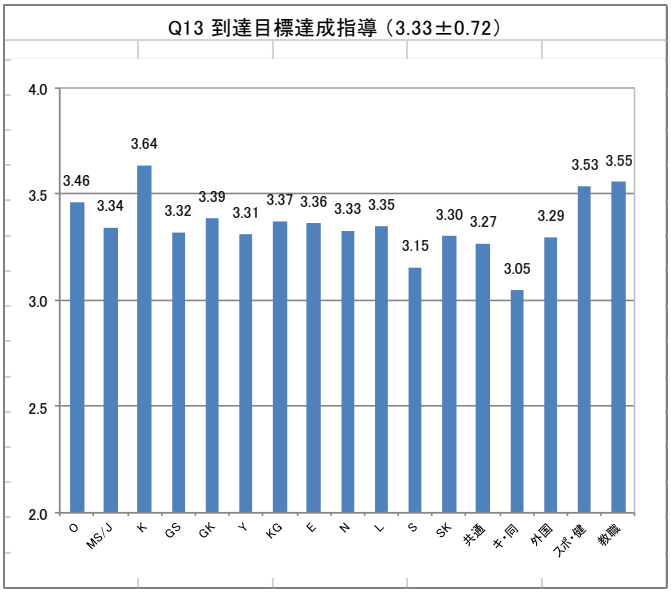
全体結果

「Q13 到達目標達成指導」は、2017 年度春学期・秋学期と同様にすべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 70～90%以上となっていました。集計結果から、今回も担当教員が授業の到達目標を的確に示すとともに、それを受講生の多くが比較的よく理解できていたと推察されます。もっとも、この結果は、単に授業内での説明のみならず、授業実施に関するＱ１～７の工夫や取り組みの蓄積として得られるものと思われます。そういった意味で、各授業担当者は、受講生の資質や要望を見極めながら適切に対

応した授業を行うことが、今後とも求められると思われます。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、数値結果の分析に基づく評価が全体的な傾向として多くありましたが、前回 2017 年度春学期・秋学期に引き続き一部の各学科ではそれぞれの目的・視点に基づく評価が提示されていました。この結果から、一到達目標に基づく授業実践の必要性が認識されていることが窺われました。



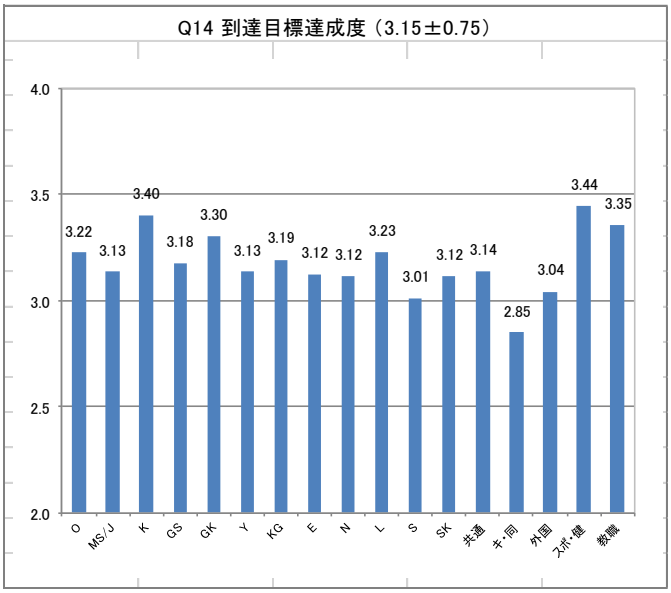
14. あなたは到達目標を達成できたと思いますか

全体結果

「Q14 到達目標達成度」は、2017 年度春学期・秋学期に引き続き、すべての学科・科目区分で「４そう思う」と「３ややそう思う」の合計が 70%前後～90%となっていました。この結果は、Q13 と相関しするもので、担当教員が到達目標を的確に示し、それを受講生も理解していたからこそ得られたと推察されます。むろん、どれほど受講生が理解できていたとしても、到達目標の設定が適切でなければ達成という評価が得られることはないため、各担当教員が受講生を目標レベルまで導く授業を行った結果の賜物と評価できます。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、Ｑ１３と同じく科目区分では数値結果の分析に基づく評価が多かったのに対して、各学科ではそれぞれのカリキュラムに基づく評価が提示されていました。特に各学科の報告からは、受講生自らが到達目標と達成したとする自己評価をどのように判断しているか、それぞれ考え方の違いが反映していることが窺われました。繰り返しになりますが、たとえ同じ質問項目でも、学科ごとのディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに照らして評価していただき、それぞれ授業改善をしていただくことが望ましい姿であると考えています。



15. DWCLA10 の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください

全体結果

「Q15 DWCLA10 の獲得」は、2017 年度春学期・秋学期に続きほとんどの学科・科目区分で「分析力」と「思考力」が高い選択率となっていました。この２項目は、ある意味で学習として基本となる能力であるため、当然の結果と思われます。これに対して、「想像力」・「プレゼンテーション力」・「コミュニケーション力」は、受講生が少人数や演習系の授業が多いと推察される学科・科目区分で選択率が高く、逆に必修の多い学科・科目区分で選択率が低くなる傾向が認められました。この結果から、授業形態や受講者数が項目の選択率にある程度関係している、という予想されていたことが前回に引き続き確認できました。残りの５項目のなかで、「思いやる力」に関しては昨年度に続き、現代こども学科、看護学科、キリスト教・同志社関係科目、スポーツ健康科目、教職科目などで高い選択率を示していましたが、これは授業の目的を反映した結果であると思われます。なお「リーダーシップ」・「変化対応力」・「自己管理力」・「自己実現力」の選択率が低くなっていますが、DWCLA10 の習得はカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに深く関係することから、カリキュラムを検討し全体の習得を達成できる授業を配置して行く必要があると考えています。

学科・科目区分コメント

各学科・科目区分からの報告では、全体的な傾向を数値などから評価されているものと、ポジティブ的であれネガティブ的であれ、具体的な項目に注目して評価されているものがありました。DWCLA10 に関しましては、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに深く関連する問題でもあるため、学科や科目区分ごとにも評価や位置づけは当然変わってくるものと思われます。このため、授業に関するアンケートから得られた結果を、どのように評価しどう活用して行くか、それぞれ検討を深め授業改善に活かして行く必要があると考えています。

＜凡例＞

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目	L	人間生活学科科目
MS/ J	メディア創造学科/情報メディア学科科目	S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
K	国際教養学科科目	ＳＫ	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
ＧＳ	社会システム学科科目	共通	共通学芸科目
ＧＫ	現代こども学科科目	キ・同	キリスト教・同志社関係科目
Y	医療薬学科科目	外国	外国語科目
ＫＧ	看護学科科目	スポ・健	スポーツ・健康科目
E	英語英文学科科目	教職	教職科目
N	日本語日本文学科科目		